



米同時テロ・2機目の衝突の瞬間

# ニューヨークの街は今-WTC崩壊から1年

2002年9月2日

吉田 朱見

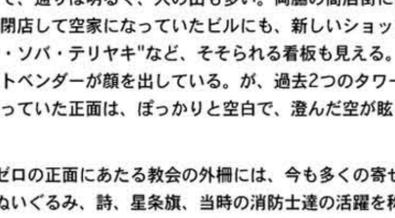
もう1年か、まだ1年か。大惨事がほんの先日のように思われることもあり、また随分昔のように感じられる時もある。感覚とは不思議なものである。惨事直後に起きたグラウンドゼロの爆弾騒ぎで周辺ビルへ避難命令が出され、通りが人で溢れかえったこと、炭素筒事件で郵便物を開くにも気を使ったこと、ハイジャックがニューヨークの人々を再び震撼させたこと、そしてアメリカ軍による対テロ攻撃開始。様々なことが起こったが、周囲の人々はそれぞれに生活を続けてきた。あれから1年、再びニューヨーク・グラウンドゼロをカメラに納めた。昨年の写真との比較し、ニューヨークの街を見つめた。



▲フルトンストリートとウイリアムストリートの角からグラウンドゼロに向かって。車両通行止めになっているため、歩行者天国のように人通りが多い。



▲ブロードウェイとフルトンストリート。事件直後も華やかにビジネスを営んでいたショップは今も繁盛しているようだ。



▲事件後、閉店し、開散していたビルには、大型のチェーンストア（Duane Reade/ドラッグストア）が開店しており、人の入りもなかなかだ。

ワールドトレードセンター跡前から東にのびるフルトンストリートは、夏の快晴日とあって、通りは明るく、人の出も多い。両脇の商店街には活気が戻り、惨事後、閉店して空家になっていたビルにも、新しいショップが参入、"スシ・ウドン・ソバ・テリヤキ"など、そそられる看板も見える。歩道には多くのストリートベンダーが顔を出している。が、過去2つのタワーによって多量にそびえ立っていた正面は、ぽっかりと空白で、澄んだ空が眩しいほどに青い。

グラウンドゼロの正面にあたる教会の外柵には、今も多くの寄せ書きがされたTシャツやぬいぐるみ、詩、星条旗、当時の消防士達の活躍を称えるヘルメットなどがところ狭しと並んでいる。当時は行方不明者の写真や花束などが多かったが、今はそれがTシャツ、ヘルメットなどにとって代わられた。中には、千羽鶴もかなり見られ、日本の心で平和への祈りを表そうとした人々がいたことを物語っている。

教会の前や横の通りでも、商魂たくましく多くのベンダーが店を出し、倒壊前のタワーや惨事時の消防隊員達の活躍などを写した写真、タワー関連の飾り物などを売っている。



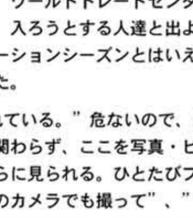
▲フルトンストリートには昔のように、ストリートベンダーが多く並び、写真や本、CD、Tシャツなどを売っている。



▲昨年開散としていたビルの隣には、今、寿司やうどん、そばなどを出すお店までが開店している。



▲グラウンドゼロ近くの教会には、寄せ書きや写真、花束などが山のように寄せられていたが、今も寄せ書きされたTシャツや消防士のヘルメット、アメリカの星条旗などが柵に溢れんばかりに並んでいる。



▲教会の前の柵には、消防士を称えるヘルメットや詩、寄せ書き、Tシャツなどが多く目につく。



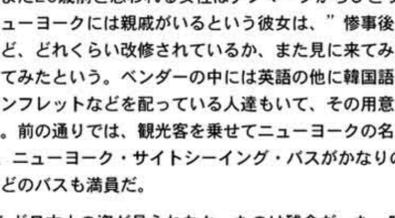
▲教会に寄せられたものの中には、日本人から寄せられたと思われる千羽鶴も。

惨事後、ブロードウェイ以西は立ち入り禁止になって、角ごとに柵の前で数人の警官がガードに当たっていたが、今はずっと奥まで歩いて入ることができる。しかし狭い道なので、ワールドトレードセンター跡を一目みようとする人々でごった返している。入ろうとする人達と出ようとする人達で、動くのもままならない。夏のバケーションシーズンとはいえ、平日にここまで人の出があるとは想像しなかった。

現場はフェンスで囲まれている。"危ないので、フェンスには上らないで"という立て札があるにも関わらず、ここを写真・ビデオに納めようと、柵によじ登る人々もあちらこちらに見られる。ひとたびフェンスによじ登った人々からは、"悪いけど、私のカメラでも撮って"、"私のお願ひよ!"とカメラを持った手が伸びてくるのだから、手に追えない。警官が数人、見回りに当たっていて、フェンスに上る人達を強い口調で注意しているのだが、あまり効果はない。



▲昨年、柵の外側で警官がガードしていた通りは、柵こそ残っているが、入るのは自由で、こちらの通りにも多くのストリートベンダーが高魂胆しく、様々なものを売っている。



▲ここからは、破壊されたビルが見えていたが、今はすっかり取り除かれ、周辺の店舗も復活。



▲ワールドトレードセンター跡。柵で囲われているが、今は歩いてここまで入っていくことができる。



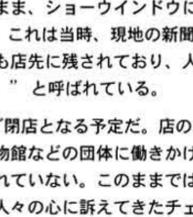
▲ワールドトレードセンター跡。今も撤去作業が進められている。

外国からの観光客らしき人々も多く、英語以外の言葉があちらこちらで飛び交っている。まだ20歳前と思われる女性はデンマークからひとりだけでやってきたという。ニューヨークには親戚がいるという彼女は、"惨事後に一度ここに来ただけけれど、どれくらい改修されているか、また見に来てみたの"と観光ついでに寄って来たという。ベンダーの中には英語の他に韓国語や中国語などで書かれたパンフレットなどを配っている人達もいて、その用意周到さには感心させられる。前の通りでは、観光客を乗せてニューヨークの名所を巡る赤い2階建てバス、ニューヨーク・サイトシーイング・バスがかなりの頻度で行き来している。どのバスも満員だ。

ただ、ほとんど日本人の姿が見られなかったのは残念だった。昨年から、ニューヨークへの観光客が減ってしまったのはニュースで伝えられていた。一時よりはその数が増えてきてはいるとはいえ、もうそろそろ戻ってきてくれないのではないかな。



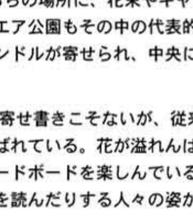
▲無惨に飛び出した鉄骨が惨事の大ささを今も物語る。



▲ワールドトレードセンター跡を見ようと訪れる人々の群れ。ビデオ撮影のためにフェンスによじ上る人達の姿も。



▲ワールドトレードセンター前の通りでは、昔のワールドトレードセンターの写真を売るベンダーが多い。



▲ニューヨークの名物になりつつある人力車が、ここでも客を探している。



▲観光客を乗せてニューヨークの名所を巡る赤い2階建てバス、ニューヨーク・サイトシーイング・バス。観光日和とあって、今日も満員。

ビル倒壊時、粉塵が街を覆った。その時の様子を人々の記憶に止めようと、灰をかぶった商品をそのまま、ショーウィンドウに安置した店がある。"Chelsea Jeans"である。これは当時、現地の新聞でも紹介された。このショーウィンドウは現在も店先に残されており、人々に"Chelsea Shrine (チェルシー聖堂)"と呼ばれている。

しかし、当店はもうすぐ閉店となる予定だ。店のオーナーはこのチェルシー聖堂を残そうと、市や博物館などの団体に働きかけているが、現在のところ、これを引き取る団体は現れていない。このままでは、閉店とともに、1年間ディスプレイという形で人々の心に訴えてきたチェルシー聖堂が失われてしまうと、店は街行く人々に嘆願書へのサインを呼び掛けている。



▲ビル倒壊時にかぶった灰のままショーウィンドウに飾った店"Chelsea Jeans"。そのショーウィンドウは今もその時のまま残され、ダウンタウンの一つの名所となり、"Chelsea Shrine (チェルシー聖堂)"と呼ばれている。

惨事後には、あちらこちらの場所に、花束やキャンドルなどが寄せられたが、ここユニオン・スクエア公園もその中の代表的な場所だった。公園入り口には山ほどの花束・キャンドルが寄せられ、中央に立つ像には寄せ書きが次々から次へと張られた。

1年経った公園は、花や寄せ書きこそないが、従来通り、都会の中の心のオアシスとして人々から喜ばれている。花が溢れんばかりになった広い入り口では、若い男の子達がスケートボードを楽しんでいる。木陰では、涼みながらジュースを飲んだり、本を読んだりする人々の姿が目につく。平和なひとコマだ。

隙間がないほどに寄せ書きが張られた像は、今もその勇ましい姿を青い空にさらしていた。



▲惨事後、多くの花束、キャンドルなどが寄せられたユニオン・スクエア。今は、すべてが取り除かれ、普通の公園に戻っている。



▲多くの寄せ書きが張られていた像だが、今はすべてが取り除かれた。